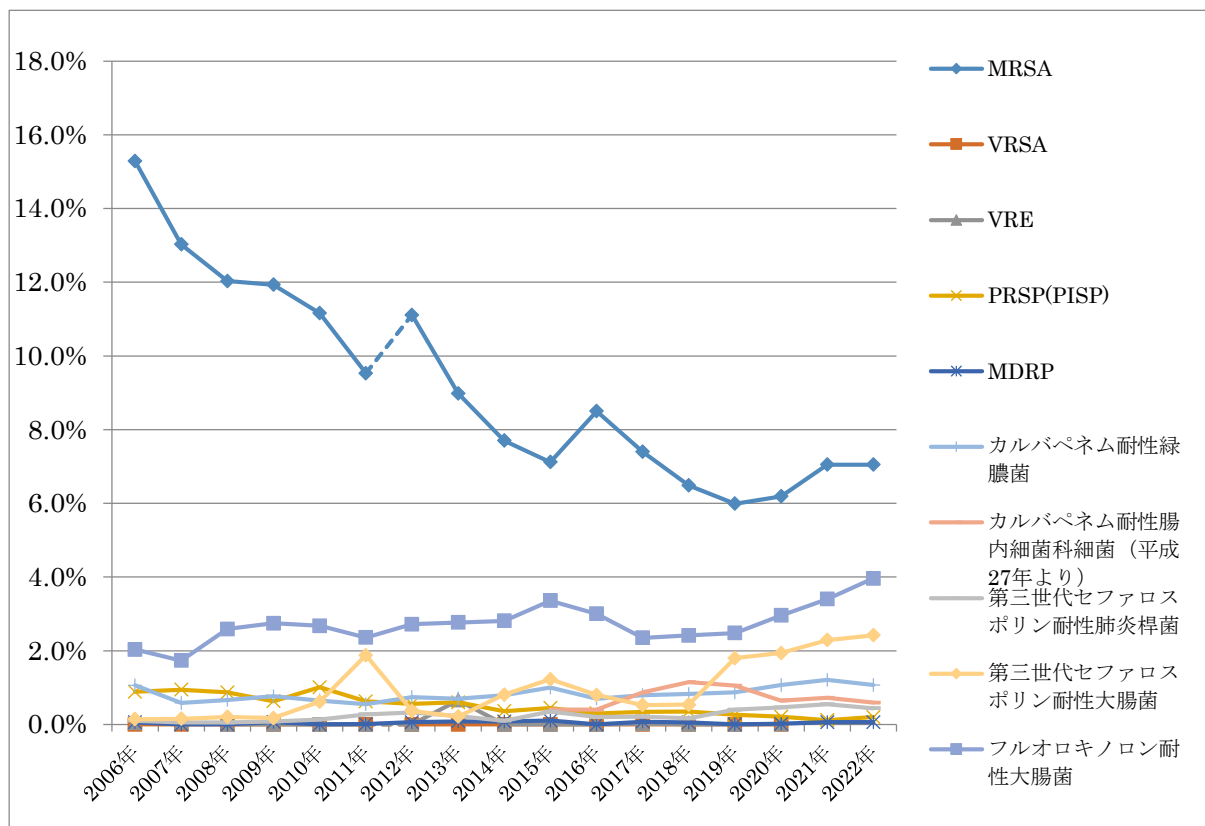


耐性菌分離率



抗菌薬の血中濃度測定の解析と同様、院内の耐性菌検出率を把握することは、抗菌薬適正使用を推進していくうえで重要な臨床指標の一つと言える。

当院は、2012年より厚生労働省院内感染対策サーベイランス事業（JANIS）の検査部門へデータを提出し、還元された結果を公表している。また、2017年よりカルバペネム耐性腸内細菌目細菌（CRE）の集計を追加した。

2022年で目立った傾向は、検出率が1%以上の菌種について注目するとMRSAは年々減少傾向であったものが2021年7%と上昇し2022年も7%と変わらない結果となった。キノロン耐性大腸菌はここ数年増加傾向であり、第三代セファロスポリン耐性大腸菌も同様に増加傾向であった。これらはJANIS参加施設の全体の分離率と比較すると低い分離率であるが、それらの減少を目指し、今後もAST（抗菌薬適正使用支援チーム）を中心に抗菌薬の適正使用を推進すると共に、水平伝播予防対策の強化など適切な感染管理に努めていく。

*算出式：(対象菌の検出患者数/検体提出総患者数) × 100 (%)

(同一患者で異なる病棟から検体が提出された場合は1患者としてカウント)

データ提供：医療の質・安全対策部 感染対策室